

資料 4 前回定例会におけるご質問に対する回答

- 柏崎の地盤に関して「新たな知見がない故、検討不要」とのことだが、2011年5月に電中研の上田圭一氏は「真殿坂断層が動いた結果、敷地内断層が動いた」との実験結果を論文発表している。この指摘は新たな知見であり無視できない。なぜ検討しないのか。

・・・ 1

- 大震災直後の緊急時対策支援システム（ERSS）の解析結果についての事実関係について。

・・・ 2

- 事故直後に保安院説明者は炉心溶融をしていると発言したところ、情報発信は官邸で一元化せよということで担当を外された。そういう解析を保安院はしたが、官邸が情報一元化の元に情報がでなかった。通信途絶は事実だろうとは思いますが、保安院は解析をしたのに、発表を封じられたのではないか。

・・・ 3

(ご質問)

柏崎の地盤に関して「新たな知見がない故、検討不要」とのことだが、2011年5月に電中研の上田圭一氏は「真殿坂断層が動いた結果、敷地内断層が動いた」との実験結果を論文発表している。この指摘は新たな知見であり無視できない。なぜ検討しないのか。

(回答)

電力中央研究所の上田圭一氏は、2011年5月に「模型実験による逆断層—活褶曲帯の発達過程の検討」という電力中央研究所報告を公表しています。本報告では、模型地盤に逆断層変位を与えて、地盤の変形過程の考察を行っているものであり、真殿坂断層の活動性に言及したものではありません。

安全審査や耐震バックチェックの審議の過程において、真殿坂断層は耐震設計上考慮すべき断層ないことは確認しています。

いずれにしましても、耐震バックチェックは、最新の知見に照らしながら、確認を行っており、今後、得られる知見も踏まえ適切に対応してまいります。

(ご質問)

大震災直後の緊急時対策支援システム（ERSS）の解析結果についての事実関係について。

(回答)

今回の東京電力福島第一原子力発電所の事故後、原子力災害対策本部事務局（原子力安全・保安院）は、ERC（緊急時対応センター）で、昨年3月11日から同月13日までの間、1～3号機の事故進展を予測しました。

これらは、ERCプラント班が独立行政法人原子力安全基盤機構（JNES）に対しERSSによる解析を依頼し、JNESが実施した解析の結果に基づくものです。

2度にわたる2号機の解析結果と3号機の解析結果は、まもなくして、官邸危機管理センターの保安院リエゾンを通じ、オペレーションルーム内に共有されました。

他方、1号機の解析結果は、緊急時迅速放射能影響予測ネットワークシステム（SPEEDI）の入力データとして用いられましたが、解析結果そのものは官邸危機管理センターに送付されていませんでした。

なお、このことについては、昨年9月2日、一連の関連資料を保安院ホームページ上で公開していますので、併せて御参照ください。

<http://www.meti.go.jp/press/2011/09/20110902005/20110902005.html>

(ご質問)

事故直後に保安院説明者は炉心溶融をしていると発言したところ、情報発信は官邸で一元化せよということで担当を外された。そういう解析を保安院はしたが、官邸が情報一元化の元に情報がでなかった。通信途絶は事実だろうとは思いますが、保安院は解析をしたのに、発表を封じられたのではないか。

(回答)

東京電力福島原子力発電所における事故調査・検証委員会が昨年12月26日にとりまとめた中間報告では、今回の事故時における情報提供に関し、公表が遅れる傾向が見られたことなどについて、非常災害時のリスクコミュニケーションの在り方として決して適切なものであったとはいえないと指摘されています。

同委員会は、この問題について今後更に調査・検証を続け、最終報告において必要な提言を行う予定であるとしている。

いずれにしても、原子力安全・保安院としては、中間報告のご指摘を真摯に受け止めるとともに、本中間報告の中で明らかにされた点で反映すべき点があれば、反映してまいります。